

補論・青年団運動リーダーの学習と地域での 生き方に関する考察

——鹿児島県青年団協議会の二役員からのヒアリングから——

小林平造

(1995年10月16日 受理)

The Supplemental Paper of “A Study on the building up Independent Youth
who can create a New Community in a region” ;
——The Study on the learning of leaders in the Seinendan (popular organization
of the youth in Japan) and their ways of life in a region——

Heizo KOBAYASHI

序

いま、鹿児島県青年団協議会が（以下「鹿児島県青協」）その組織数においても、内容的にみても活性化している。県組織での組織数の向上は、日本の青年団運動全体のなかで、ここ20年ほど生み出すことのできなかつた成果であり、注目に値する。そのやや詳細な紹介と分析は、小林平造「青年自身が世界を読み取り、歴史を綴る筋道——鹿児島における青年団運動の成果と分析——」（『月刊社会教育』1993年5月号、国土社）でおこなった。ここには、この小論を前提として、こうした運動の中心的な役割を担ってきた青年団リーダー二人の学習と生き方について、ヒアリングをもとに分析し、本論（「地域づくりの主体形成と青年に関する研究」）での検討を補っておくことにしたい。

登場する人物は、次の通りである（敬称略）。

- ①有馬博明：1960年始良郡霧島町生まれ。1983年、鹿児島経済大学卒業と同時に霧島町青年団に入団。その後、郡青年団協議会会長、県青年団協議会役員を経て、1991年、同会長に就任。1992年から95年3月まで日本青年団協議会常任理事を務めた。現在は助言者として運動を支える。霧島町役場企画課勤務。
- ②神蘭清広：1962年川辺郡川辺町生まれ。県立川辺高校卒業と同時に川辺町連合青年団に入団。県青年団協議会役員を経て、1992年同会長に就任。会長を2年間務め、現在は助言者と

して運動を支える。13年間勤務した川辺町役場を95年3月に退職し、現在からいも交流財団専務理事。

鹿児島県青協のここ5・6年(第二次発展期)のとりくみは、ごく意図的なものである。それは、青年団の持つ歴史的・伝統的な体質を大切にしながらも、青年団に現代青年と現代地域社会にとっての新たな意義を付与していくことで、組織力と運動内容の活性化を図っていかうとする青年団改革構想であるといっている。それが、「青年の成長を重視する青年団構想」である。例えば、地域や社会課題へのとりくみに対しても、むしろとりくみの重点を、これに参加する青年の学びと成長に置いてきた。この構想を具体化する中心のとりくみが、市町村と県の青年団組織を担うトップリーダー養成をねらった県「アクティブセミナー」であることを、まず指摘しておこう。また県全体の青年団運動を活性化していかうとするこの実践は、鹿児島県青協を担うリーダー、そして市町村や郡・地区に点在し、諸とりくみの具体化を保証するネットワークカーとしてのリーダー、この二種類のリーダーを持つ役員集団の組織的力量を高めていくことに力点が置かれている。すなわち、県団推進型青年団活性化構想という特徴を持っているのである。こうした構想や実践の重点をなぜ位置づけたのかについては、現代社会と教育問題、そして今日の青年像及び青年団運動の諸問題に関する吟味を背景としているが、これについてはすでに先の小林小論で言及したのでここでは省略しておこう。

一. 地域と青年団で「他者と共に生きること」の価値を学ぶ

——県青協リーダーの原点・神菌清広の場合——

少年時代 私の親父は一代で三回も家を建てた。貧しい農家に生まれた親父は、福岡の炭坑に出稼ぎに行き、その貯金を元手に家の新築と田畑の購入で自分の青春時代を過ごした。しかし、世の中うまくいかないもので毎年のように襲ってくる台風によって最初に建てた家が翌年に壊され、また出稼ぎに行く羽目になってしまった。私の生まれた川辺町の集落は、ほとんどの家庭がそのような状況であり、親父たちが子どもの頃、修学旅行にも行けなかったなどという話を何度も聞かされた。そんな背景があり、集落全体がハングリー精神と互いの生活を支えあう共同の精神を非常に強く持っていた。親父たちは食っていくことに精一杯だったから、そんな中で育った子どもたちも、遊び、夏休みの宿題、家の手伝い、そしていたずらなどまでも、ほとんど共同で行った。例えば、夏休みも終わりに近づくと公民館に全員集合して先輩が後輩に勉強を教えるなど、縦の人間関係に自然と慣れ親しんで少年時代を過ごした。

町青年団時代 地元の高校を卒業した私は、町役場に就職し、さっそく集落にソフトボールチームを結成したり、崩壊していた子ども会の復活に一役買った。青年団にも、誘いがあつてごく気楽に入団した。しかし、初めは青年団よりもむしろ大好きな野球やソフトボールに夢中だった。

入団して2年目のある日に、青年団がたまり場になっている町の公民館の団室に呼ばれた。そこに

は、怖い顔のお兄さんや、優しいお姉さん方がずらっと勢揃いしていて、青年団のおもしろみや現状を懇々と説明した。結局、私に町の青年団の役員をしろとのお達しであった。後で聞いた話だが、あまり熱心な団員とは呼べない私だったが、出席した時の生意気な発言に怒った先輩方がとりあえず現実を見せるために、役員をやらせてみろとの暖かい配慮による人事らしかった。元来他人との共同作業が好きで、反発心旺盛の私は、断る術もなく文化部長を引き受けた。

私の最大の仕事は、翌年3月に開催される予定になっていた郡の文化祭を成功させることであった。そのために、様々な人々と出会い、いろんな仕掛けをしたがこの時の一番の収穫は、私の20代の人生に決定的な影響を及ぼす数人の先輩方との出会いであった。とにかく厳しく妥協を許さない青年団の活動家たちだったが、特に嬉しかったのはその面倒見の良さに触れることができたことだった。ある先輩の家には、会議の終了後にほとんど毎日のように寝泊まりし、恋愛や地域の実情、そして政治や様々なことを教えてもらった。このような先輩たちとの出会いや活動の積み重ねを通じて、私は物事の本質を見つめることの大切さを知った。

地域おこし塾や労働組合など また、「からいも交流」（鹿児島で繰り広げられている国際交流活動）や川辺町で地域づくり活動を進める「ぼっけもん塾」、そして労働組合の運動にも深く関わった。青年団活動を核としたこれらのとりくみのなかで、私は、地域の矛盾や世界的な視野を持つことの大切さを知り、社会の変革のために自分ができることは何かを考えるようになった。もちろんこうした学びの原点は、青年団活動で多くの仲間を得たこと、そして仲間と共に生きることの豊かさや喜びを心に刻んだことにある。

二. 町や郡の青年団運動をどう切り拓いてきたか

——県青協リーダーの原点・有馬博明の場合——

自由と仲間と青年団、そして組合活動 当時、霧島町では、なにも、自分から進んで青年団という「組織」に入団した者はいなかったと思う。もとより、子どもを管理する傾向の強い学校、最近では「管理教育」といわれる学校から卒業して働き始め、自由に使える時間と金を手にしたのだから、自分が管理・束縛される「組織」にはかかわりたくなかった。だから「青年団」は何となく面倒くさかった。

しかし、一緒に酒を飲んだり、遊びにいたり、唄を歌ったり、ロックバンドをやったり、語ったりする友達は欲しかった。「もう社会人なんだから」という親の管理からも逃げたかった。たまたまそこに、同級生がいた、悩みを聞いてくれる兄ちゃん達がいた、俺と一緒にバンドをやりたいという奴がいた、俺の唄をうまいと誉めてくれる女性がいた、そして恋する女性がいた。そんな仲間たちがいた。その仲間の集まりのことを青年団と呼んでいた。彼らと一緒にいると本当に楽しかった、毎晩のように飲んで騒いだ。飲み屋から直接職場（町役場）に行くこともしばしばだった。給料は全部飲み屋の支払いに消えた。殴りあいの喧嘩もした。だけどいつのまにかその仲間の中に自

分の存在があった。こんな青年団の組織活動の楽しさが影響してか、嫌だった組合運動についても必要性を感じるようになった。県青協役員1年目の時、町では役場の職員組合青年部長もまかされた。そして、単位組合の歴史上初めて、県下でも町村の組合では初めて、学習を重ねながら青年労働者だけで町長と団体交渉を持ち、様々な要求を実現した。それは、働く青年の権利というものを自覚した最初の体験だったのだと思う。

感動を分かちあう青年団づくりが俺の「地域づくり」 青年団のことや、人生について真剣に議論する場もあった。全団員公民館に泊まり込んで不満や希望を語りあう夜もあった。そこでは、どんな小さな意見も大切にしてきた。例えば、みんなで旅行をしたいという女性団員がいたので、マイクロバス貸切りの旅を楽しんだ。この時の感動は、韓国への平和問題体験学習に結実し、誰もが体験を通して歴史や社会の真実を学ぶことの大切さを知った。この体験が、県青協事業の「ハートフルピース in 沖縄」(前出、小林小論参照)を生み出す原点となった。また、青年が地域に情報発信する場として演劇を中心とする青年祭を実施した。町青年団機関紙の全戸配布は今でも続いている。さらに、青年の手づくりによる夏祭りも続けたが、これはもうすっかり観光地霧島の夏の風物詩になっている。たしかに大変な取り組みも多かった。しかし、いいかげんで楽をしたとりくみには感動は残らなかった。必死にとりくんだ行事にこそ感動は残る。流した汗と涙が感動のエキスで、これが俺にとっては青年団活動の宝だった。

振り返ってみれば明らかに、親、社会から逃避して青年団という仲間集団に寄り添っていたのだ。しかし何時しか、青年団運動に熱を入れてとりくむ自分が生まれていた。だから、もっと青年団を良くしたい、大きくしたいと考えた。青年団活動で出会ったような仲間を一人でも増やすことが、俺たちにできる「地域おこし」だと真剣に考えていた。一緒に生きたい仲間や恋人がいないマチは、住めるマチであっても、生きる喜びを実感できるマチではないと考えたのだ。

出会いに学び、人に惚れて鹿児島県青協へ また、青年団活動は多くの人々との出会いを生み出した。それは青年団関係者だけでなく、「むらおこし」のリーダーやマスコミ関係者、そして教育関係者、大学の研究者など様々であった。俺にとって、様々な人々との出会いは喜びだったので、むしろ積極的に出会いの場をつくりだしていった。青年団に批判的な人ともしばしば語りあったが、案外そんな語りのなかにこそ、青年団活性化のヒントがあったりした。そして批判する人も、語り込んでいくうちに青年団ファンに変わることが多かった。そんな出会いの中に、すごい兄ちゃん、姉ちゃん達との出会いがあった。その人たちは、仕事にも、青年団にも、仲間にも、自分自身の生き方にも中途半端じゃなかった。いつかは俺もあんな人間になりたいと思った。それが鹿児島県青協の役員達だった。

こんな風に町や郡での青年団活動をしていた自分であったが、今は、県青協役員から会長となり、日青協常任理事をつとめている。そして今度は、自分が次の青年を育てる立場になった。格闘の毎日でもある。青年団活動のなかで得た暖かく、かつ厳しい人間関係は、生涯にわたる俺の宝として生き続けるに違いない。

三. 鹿児島県青協の改革・発展構想づくりとリーダーを育てる力

有馬、神薗は、以上に示した体験をふまえて、鹿児島県青協役員となり、後に会長を務めた。両者は、ここ数年の鹿児島県青協第二次発展期を創りだしたリーダー集団の中で中心的役割を果たした。ここでは、この時期を中心にして鹿児島県青協の力量を生み出したものについて二つの側面から紹介し検討していくこととする。

ところで、現在の青年団運動は道府県青年団組織に関わる二つの大きな弱点がある。第一に、道府県の役員組織が十全な組織体制と力量を持たないことである。これについては特に、運動を支える人間関係を切り結べない現代青年問題がその大きな要因となっていることを指摘しておこう。第二に、道府県青年団組織がその青年団を改善し、発展させるための構想を持たずにいることである。その原因は、青年団の現状を正確に把握し、新たな青年団構想を生み出す理論力量の欠如にある。鹿児島県青協のとりくみは、その弱点において極めて示唆的である。

(一) 鹿児島県青協の改革・発展構想づくり ——その二〇年史——

県青協混迷期 鹿児島県青協の今日までの経緯を見てみると、決して一朝一夕に発展したのではなく、他の地域同様、高度経済成長期以降の社会構造の大きな変化のなかで衰退の一途を辿っていた。特に、1970年代後半は、度重なる県青協会長選挙が行われたことで、県青協役員体制が派閥化し、役員数が6名程度にまで減少するという状況であった。一方では、県青協と市町村団の間に亀裂が生じていたのである。したがって県青協運動はほとんど機能しなくなっていた。

第一次発展期 1980年代になると、県青協のこうした状況を改革するためのとりくみが展開された。第一に、県青協組織を建て直すために①役員体制を充実させ、②専従事務局長を配置、さらに③団員登録制を取り入れることで、④県青協財政を確立させた。第二に、県青協事業を次の三分野で強化させた。まず、②県下の青年団リーダー養成を保証するために、初夏の「県活動者研修会」、秋の「県女子青年集会」、冬の「青年問題研究集会」を100から150名が参加するものにしていくことである。次に、②千名が集う県青年大会を実現すること。さらに、③行政や他団体、報道関係との連携と信頼関係づくりをすることであった。こうして、県青協の組織体制づくりがすすみ、年間の諸行事がほぼ定着、市町村団と県青協との信頼関係が回復していったのがこの時期の特徴である。「県青協は市町村団の太陽であれ」などと言われるようになったのもこの頃からである。しかし、それでも団員の減少傾向をくい止めることはできなかったのである。

第二次発展期 1988年以降は、「青年の成長を重視した青年団構想」をもとに、今日の発展段階を迎える期間である。ここでは、鹿児島大学に赴任してきた日青協助言者、小林の全面的な協力のもとに県青協会長の私的諮問機関・「ブレーン会議」が組織された。そこでは、リーダー養成と青年の成長を重視した青年団構想づくりに着手、「この時代状況で団員が増えるなどという夢のようなことを言わないで、むしろ、団員が減少しない豊かな質をもった青年団づくりをすべきだ」とさ

れたのである。

(二) 鹿児島県青協リーダーを育てる力

先輩の厳しい「叱り」が後輩を育てる 県青協役員会は夜の9時から始まり、おおよそ午前1時程度になることがしばしば。そんな時にOB曰く「ここで議論をしている間に市町村団は弱くなっていく、地域を歩いてまわれ」と。研修事業の助言を先輩にお願いする。するとOB曰く「事務的にお願いするな、事業を成功させようとする情熱を感じない」と。研修会当日の夜、県青協役員三役は朝までとっていいほどOB諸氏から「叱り」を受ける。「参加者が予定人数に達していない、担当副会長はなにをしている」、「なぜ、ここまで来て県の役員だけで交流している、今日は参加者と徹底的に飲め」、「会長の開会の挨拶は、配慮と気合いが足りなかった」等々、延々と続く。

その「叱り」の中身がいいのである。事業のノウハウや運動の筋道などにふれることはほとんどない。それは、現役の仕事である。OBたちは、県青協役員としての気概やプライドについて現役役員の甘さを指摘するのである。そして、そのことによりOB自身も現在の青年団運動に先輩としての責任を果たす必要と熱意を実感するのである。また、現役としてその洗礼を受けた者は、後にはOBとして確実に運動の魂を教えようとしている。鹿児島県青協においては、こうして先輩から後輩への運動の魂の継承が保証されることとなる。

県青協の構想づくりとアクティブセミナー 第二次発展期の青年団構想をつくる段階で、事態を動かせるリーダーの不足が決定的であることが明らかになった。その要因は、先輩から後輩への運動の継承が着実に行われなくなったことにあるとの分析と総括を得た。このことは重要であった。しばらく前まで、鹿児島県内の青年団では、こうした継承は十全になされており、それが鹿児島県青協の大きな力量の一つであった。必要に駆られて、退引ならない決意のもとに「県アクティブセミナー」をスタートさせたのだ。平成元年度から始めたこの活動は、名実共に青年団運動を動かせるリーダーを5年間で100人育てることを目標にした。そのために、県内各地で県青協役員一人が一人の参加者を組織し、年間を通じて、その参加者に直接関わって行く形態をとった。こうして、「県アクティブセミナー」は後継者を育てるとりくみであるが、県青協役員にとっても大きな学びの場となっているのである。

内容は、①現代青年像と今日における青年団運動の意義、そして鹿児島の地域課題や青年団の地域づくり論などを系統的に学ぶ講義と、②参加者一人ひとりにとっての青年団活動に関わる意義を問題解決学習的に深めるグループゼミ、③先輩の青年団運動に対しての情熱やそれまでの人生において青年団運動体験が持った意味を学ぶ特別講義の3本柱で構成されている。また、このセミナーでは常任講師の役割は非常に重大で、前後期4泊6日以外の期間にも個人的な悩みの相談があったり、補講ゼミが行われたりする。

鹿児島本土から遠く離れた奄美群島の青年団づくりも重要課題である。そこで、1992年度から「AMAMI アクティブセミナー」を小林研究室を事務局とする鹿児島大学教育学部公開講座との全

面的な連携で開催し、奄美の地にリーダーを育てる作業も本格化している。このセミナーを通じて、着実に次代のリーダーが育ちつつある。しかし、まだまだ数が不足している。油断するといつでも人と運動の継承が行われなことを肝に命じている。

県青協役員間の厳しく暖かい人間関係 鹿児島県青協役員一人ひとりにとって、互いに共通するおもしろい、青年団運動をもっともっと発展させたいということであり、それが地域を担える人材を育てることに結ぶと確信している。そのために繰り返し繰り返し厳しい議論が行われ、OB や助言者からの指摘にも率直に耳を傾け、期待に答えようとする雰囲気醸し出している。

たとえば、組織が壊滅状態にある地区で県青協の事業を開催しようとする場合。まず、その地区の担当役員に対して、徹底的にその事業を取りくむ意義や役員自身にとっての意義について、そして具体的な戦略が議論される。「このままでは、あなたの町の青年団はだめになる」、「あなたは地域にどんな責任を持っているのか」、「あなた自身がこのままで本当に納得するのか」、「あなた自身は何故に青年団をやっているのか」等々。それは、役員会や OB・助言者も交えての頻繁な「飲方（ノンカタ）」（酒宴）の席でも語られる。この議論に、いくらでも、掛け値なしに時間を使うのである。やがて、その役員自身による「私が私の地区でその事業をやりたい」との発言が生まれていくのである。そして、その議論に加わった者は全員が責任持ってこの役員を後押しする。このような場面が実に感動的である。こんな場面の繰り返しが役員自身に気概とプライドを芽生えさせ、県青協役員相互の「共感的人間関係」を創り出している。それは生涯続く人間関係の始まりでもある。

四. 新たな人生選択 ——青年団運動からの飛躍へ・神菌の場合——

自分の課題の克服 私の青年団活動の基調にあったものは、厳しくも暖かい人間関係であった。農家に生まれた私は、青年団活動にのめり込むにつれて、家族の労働力としての期待に応えられなくなっていく。そんな時に仲間たちは幾度も私の家の畑を耕し、稲を植えてくれた。また、その仲間たちの期待に応えようと私なりに青年団を懸命にがんばった。県の会長に選任された時に心から喜んでくれたのは、そんな仲間たちだった。

私は元来、怠けることが好きで、瀬戸際にならないと行動を起こさない自分の弱点を自分自身が一番よく知っていた。その弱点が、青年団活動の中でもちよくちよく頭をもたげそうになった。たとえば、町の青年団事務局長をやっていた時に、ある劇団の公演に行った。本番まであと2週間しかないのにほとんど独断で引き受けた私は、公演まであと3日のところまで来てチケットの売れ行きが悪さに逃げ出しそうになっていた。その日の作業を休んで、隣町に遊びに行っていた私が夜中に帰ると家の前で数人の仲間が待っていて、この公演の意義を私に切々と語ってくれた。私は顔から火が出そうなくらい恥ずかしかった。私が決めた公演について、仲間からその意義を聞かされたショックで穴に入りたい気持ちだったが、同時に私の弱さを見透かして、私に力を貸してくれる仲間の存在が私に勇気を与えた。私は、大事な局面でいつも叱り励ましてくれる他者がいて、ここま

でやってこれたのだと思う。また、青年団活動を核にして多くの活動に触れ、様々なネットワークが出来ていった。たとえば、政治の状況を知り私たちがなりの政策を生み出すために政策の勉強会を始めた。将来はこのメンバーから議会の場に巣立つ人間も生まれてくるだろう。また、国際交流の活動を通じて世界の広さやODAの貧しさも知った。これからも新しい動きをつくりながら日本の国際貢献のありかたを考えてみたいと思う。

これからの生きざま このような様々な活動や他者との出会いの原点は、この地を生き生きと住み良い地域にしたいとの願いであった。このことを出発点にして私は、この不景気な時期に役場を退職し、国際交流団体に就職することにした。ここをフィールドにして、私はまず二つのことを手がけてみたいと思っている。一つは、地域で様々な活動を行っているたくさんの人々のネットワークの拠点をつくり、その人たちが学びあうシステムをつくること。二つには、様々なボランティア活動が正当な評価を受け、活動を支援する仕組みを生み出すことである。このことを念頭に置きながら、県内の各地でうごめいている多くの仲間たちのパワーを引き出すことができたらと思う。

地域の過疎化と高齢化が進む鹿児島では、多くの若者が生まれ育った農村地域から離脱していく。その傾向に強弱はあれ、高度経済成長期以降、相変わらず重たい地域課題である。そのなかで私たちは、かけがえのない青年期を青年団員として生きてきた。いま青年団活動を経て、地域の中堅としてがんばっている仲間たちが、だんだんと地域社会の表面に出てきている。政治や経済、そして地域おこしや文化など様々な場面で核となって動いていくであろう仲間たちと共に、鹿児島で生まれた人間が鹿児島の地で生きぬくことのできる地域社会をつくりたいと心から願っている。それが、ポスト青年運動をスタートさせる私の課題である。